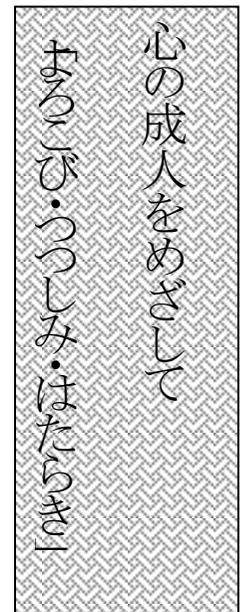


第669号
令和3年3月23日
題字は二代真柱様
大阪市北区池田町13-17
天理教はるのひ分教会
TEL・FAX
06-6358-2630

福氣ぐらしへ学びと試み
はるのひ館



▶はるのひホームページ▶
▶QRコード▶
▶毎月発行▶
▶1日1回▶
▶29日▶
▶09時▶



『世界は広く永くそして深い』

江戸時代では生涯に一度のお伊勢参りが夢だったというから、生まれた村から一步も出ないまま人生を終えた人々も多かったのではないのでしょうか？世界は広いぶん狭かったのですね。

しかし知識が増し技術が進むにつれ世界は広まり、現代では地球はおろか宇宙にまでまた他方マイクロ方向では分子原子にまで人類の視野は拡大しました。

空間的視野だけではなく、時間的にも宇宙の始まりはビッグバンだったとか

太陽の寿命は今ちようど半分で、あと50億年残っていると、過去にも未来にも視界が遠く伸びました。『第660号』に書いた通り、広く永く見晴らしがきいて、今や人類は虫の目、鳥の目どころか

神の目に近づいてきたと言つてもいいでしょう。でも、神の目に至るにはまだ重要な領野が足りません。

世界は広く、永いだけではなく深いのです。さすがの科学も技術も世界の深さを測ることはできないようです。

深さすなわち世界や人生の価値、意味、可能性を探求するのが宗教、哲学、思想ですが

科学技術の発達に反比例するように、現代では深さの探求、知恵・叡智の深化がとてもしなくなりまし

結果として、物質的には申し分のない世の中になったはずですが、暴力、貧困、抗争があとを絶ちません。

オーム真理教を初め、カルトに若者が走るのは深さへの欲求がなせるわざかも知れません。

今こそ、歴史に学び、将来に想いをはせ、世界観・人生観を練り磨いて

大木のようにしっかり大地に根を張るような生き方が大切ではないでしょうか？

二月月次祭祭典講話

会長 芝太郎

『一日一回おさづけの本について①』

記念行事として

今年の十一月二十三日にこの教会が出来まして六十周年、その記念祭をつとめさせて頂く予定で進めております。女性の方々にはすでにそれぞれ自分の鳴り物とかおてふりを決めてもらって練習が始まりました。ありがとうございます。おつとめが一番基本、大切です。良いおつとめができるように残りの十ヶ月ほど練習を重ねていくんですけれども、もう一つは六十年ですから、還暦ということ、やっぱり戻ること、元一日を振り返る。そういう意味で初代会長はありがたいことにたくさん本を残してくれていますので、今その中でも『一日一回おさづけ』をできるだけ色んな人に読んでもらって信仰を知らない人でも、この本は分かりやすくまた面白い、一人の人生、芝太七という一人の人生を辿るように書

いてくれていますので面白く読めると思うんですね。だから一般の方々にもぜひ特に若い人に読んでもらって感想を聞きたい。反対や否定の意見でもかまいません、どんなふうな意見を聞かせてもらえるか、今の時代ですと大変めずらしい人生ではあると思います。ぜひそれを薦めてもらいたい。まあそういう意味で今後この本に沿って少しずつ講話を毎月務めさせてもらったらなあと思っています。

病気のつらさ

父がシベリアから帰ってきて、天理駅で母の姿を見て信仰を始めた。それまでは信仰なんか大嫌い、神様は何か分からない、と言っていたその父が、九死に一生を得て帰ってきた、母の飾らないモンペ姿を見て、これからの自分の人生の、これこそ一番の通り方だと直感で感じたんでしょね。それで信仰を始めるようになった、と書いています。

天理の教への勉強するのには三ヶ月間の修養科の勉強させてもらうのが一番っていうので、母に勧められて修養科に入れてもらったんですけれども、後すぐにですね。身上、病気になるっているんですね、父も母も。

私なり子供なりはおかげさまで病気をほとんど知らない。

病気の苦しきさつていうのを知らない。『みかぐらうた』の中にもいくつか、「病むほどつらいことはない」とか、病気に ついてのお話が出てきます。今の日本はその点でとても進ん だと言うか恵まれたと言うか、時代、社会になってきていま す。今病気が全然なくなったわけではないけれども、みんな 長生き高齢の時代になっているんですね。昔は病気で倒れ ていた。病気で亡くなる人が多かった。若くしてもね。今は 衛生も良くなったし医療も整備された、これは素晴らしいこ とです。世界中を見てもよく言われるように保険制度がこん なに整っている所はない。だから病気にかかっても早く治療 をしてもらって、治りやすい社会になっている。皆さんこれ みんなついつい当たり前と思うけれども決して世界の現実 を見ると当たり前ではないんですね。これほど素晴らしいこ とはないけれども、他面やっぱり何でも良い面だけではない んですね。もう一面は健康になって長生きできるように なっているんですけども、病気を知らないということは命を 知らないということにもなるんですね。だからこれは大きな問 題ですね、父も母も重い病気それこそ命に関わる病気をし ています。どうでしょうか、皆さん、本を思い出して父の話 を思い出して、最初にかかったのは何でした？。 何の病気？

そう、喘息ですね。修養科に入って感激のうちに一か月が経 った。入学して一か月、九月三十日突然発熱で父は寝込んで しまった。高熱だから学校へは行けない、心ならずも休まね ばならなくなった。ズーとの高熱が続いてそれと入れ替わり に熱は下がったけれども咳が出始めた。その咳が普通の咳で はないのである。寝てはいられない。起きて布団を丸めてそ れにもたれかかって、咳き込む。女房が寝る時に夜中に着替 えるようにと寝巻きを四枚も五枚も積み重ねてくれる。朝に なるとその寝巻きが汗で絞れるようになってというぐらい ですね。苦しいですよ、咳がどんどん出てね、普通の咳は誰 でもちよつと出ますけどね、ところが止まらない、汗が出て しかも寝巻きを着てもその寝巻きがびしょびしょになるぐ らいね。それも四枚も五枚ですよ。そんな苦しい咳が毎日毎 晩続く喘息。喘息の苦しきなんですね。これが最初の病気 です。

これなんで治ると思いますか？普通喘息になったら、そう 簡単に治らない。ところが治ったんです。それはその頃に修 養科出たら修養科の先生しなさいという話があったらしい。 ところが父は高校の先生でもさせてもらったよかろうと思 っていて、天理教を専門にするつもりは全然なかった。だか

らその修養科の先生なんかなる気はない。とんでもない。そこへ柳井徳次郎というおたすけの名人先生がおられて、あんなな、咳苦しいな、喘息は苦しいで、御守護もらおうと思っ

たら直してもらおうと思ったら、修養科の先生になりなさい。と出たばかりでしかも天理教ほとんど知らない。そんな者がなつていいんでしょうか？だけど直して欲しい。治るんでしょうかと思つて、その日のうちに決心してね。母と二人で相談し、とうとうその晩二人の相談が決まった。神殿にお参りしてお誓い申し上げた、四月から修養科の講師を務めさせて頂きます。それまでに二月中で検定講習を終わらせて頂きますからこの喘息を助けて下さいとお願い申し上げて帰つた。その晩は比較的遅く床についた。翌朝目が覚めてびっくりした。夜中に一回も咳はなかった。五枚の寝間着はそのままで喘息は一夜の間に完全にご守護を頂いたのである。以来三十五年間、喘息のかけらもなくおつれ通り頂いている、ということだね。半年ぐらい続いてたんですよ。半年ぐらい続いてた苦しい喘息がたった一晚、柳井徳治郎先生が修養科の講師になりなされ。わけが分からんけれどもそれを聞きまじした上で、夫婦で神殿にいつてそうします、と。その晩ピタツと止まって全然あと出てこない。こんな鮮やかなと言うか信

じられないような話ですね。

産褥熱

二番目に出てくる病気は何でしょう。今度はね母が産褥熱。父が帰ってきたのが昭和二十二年。僕は二十三年の六月に生まれたんですけども、その後母の体調が悪くなる。母はもともととにかく弱かつたんですよ。バケツいっぱいの水が持てないほど。まあ出産が大変体の負担になったんですよ。今度は水が溜まるんですよ。体には水がいっぱいあります。七〜八割と言われてますよ。その水が巡ってくれ働きをしてくれているからいいんですけど、心臓が弱くなると余分な水が溜まつてむくんでくるんです。その心臓が弱つて水が溜まつて横になるとこれもまたゴボゴボと出てくるというくらい体の中の水が溜まる。横になれないから柱の前にお布団を置きそれにもたれてね、聞いただけで苦しいでしょう。これがまた続くんですよ。母はもう医者薬いらんということに注射もしないし薬も飲まないし、治らないです。どうしたか、父が毎晩毎晩看病するんですけどね。まあ僕やったら三日もしたら音上げると思っけど、もうとにかく母の看病しながらね、ほとんど寝れない。一生懸命助けてほしいと思つて看病する。ところがこれが芝家の因縁だと。本当は亡くなるとこ

ろ、命がないところ、代々、みんな早死にですからね。だから養子を迎えたりするわけですからね。何百年とそれが続いてるんやから。神様にね、通りますよこのまま通りますから、妻の命は助けてくださいと。病気はもうこのままで結構です。私は看病続けますと。何十年でも続けますと。それを甘露台に心を定めたんです。お誓いしたんですよ。そしたら便になつてどんどんどんどん水が出てきたんですよ。勝手な話だけど便はつらいです。と言つてまた次の日にお願ひしたら、今度おしっこに出た。シヨボシヨボになった、むくんできたのがね、水がいつぱんに出たからシワがよるぐらいね。完全には治らなかった。その後もね母は弱かったですけれどもその苦しいのはね、なんとか助けて頂いた。

肺結核

その次は何ですか、今度は父がまた肺結核になった。当時は結核の人がまた多かったですよ。で、結核病棟に特別の修養科があったんですよ。その先生に行きなさいということですよ。そんなことようしたね？今のコロナと同じですよ、今やったら陽性って分かったら病院に入って隔離されてね、まあ結核も隔離はされてんだけど、そこへわざわざ行って結

核の人達と話をして、そらうつりますよね。血を吐いたんです。初めはちっちゃなマッチの頭ほどの血、なんやろなあ。それが父も書いてますけど自分のこととなると甘く見るから、大丈夫やろ大丈夫やろ、ところがどんどんどんどんその血が増えていく。肺結核ですよ。もう駄目です、命がほとんどないのですが、柳井徳治郎先生の進言でね、助かりたかつたら布教に出なさい、分かりました、心定めました、もうどうなつても自分の命はどうなつても結構です。人助けに教祖のひながたを三日でも、一日でも三日でも実際に歩む。それができれば本望ですよ。命はもう助けて下さいとは申しませんとお参りしてお誓いしたらびたつと止まった。正月二日。ものすごく出たんです、口から血が出たゴボゴボと。ところそれで終わって、あと血が出ない。父もまた薬も飲まない注射も持たない。常識外れですよ、お医者さんからすれば怒られますよ。そんなバカなという風に。そういう病気をね、母も父ももう死ぬような、死んでもおかしくないところまで行っている。

私はその後、小学五年生の時にね、急性腎臓炎をしたんですよ。腎臓の病気ですからやつぱり水が溜まっておしっこが出なかって、むくんだんです。ところがまあそれも父や母

のおかげで助かった。あの当時は布教の最中ですからお金はないんだけど皆さんのお供えのお金を洗いざらい。腎臓はおしっこを作っておしっこを出して体を掃除をするところだからね。だから出し方が足りないんだと思って、本部へあり金集めて、当時のことですからそんな大金のはずはないですが、皆持つて行きますと言つて本部へお供えに言つたんです。そしたら僕が昼過ぎぐらいちようど母が神殿に行つて頃おしっこが出だしたんですよ。どんどんどん、お父さんおしっこばかり出るわ、母がお参りしている頃に出だした。もうそれで僕はあの腎臓たすかつたんです。

医者はまだ入院しかないよと、こんな小さい子供で血圧が二百以上もあつてね、大変なことになるから入院しかありません即刻入院。しかし入院するお金もないし、神様におすがりするしかないということで、私は全然治療もしてないですよ。母がお供えしに行つてそれでその時からおしっこが出てもう治つたんです。

命の真実Ⅱいつも崖っぷち

今までのところ、僕はわずかにそれだけがあつたんですけど、ほとんど何も病気がない。病気の恐ろしさ病気の辛さが

ない。おそらく皆さんもそうないと思う。今の若い人は僕の子供なんかははみんなおかげさんで病気の経験がないんですよ。それはありがたい、ありがたいけれども、一面生命の値打ちがわからないのです。直面するようないつも言つてるように生きてるといふのはみんなこの生きている世界の真ん中にいると思つています。しかし真ん中なんか 아닙니다。人間はいつもこの端っこにいるわけです。死ぬか生きるかその崖っぷちにいるわけです。お金があつても若くてもみんなこのはしっこにいるからいつどうなるか、本当は分からない。何が起きるか分かりません。毎日、朝のニュースの一番は火事ですよ。いつどうなるか分からない。それが「かしの・かりもの」ということです。自分のものではない、自分のものだったらいつまでも持つてますよ。二百年でも三百年でも。だけど、元氣、ずっと元氣だつていうことはいつの間にか、生きていくということは真ん中にいると思ひ込んでしまふ。だから緊張感がない。命のありがたさが分からない。それでね、僕は今月の月報一面に「なぜ命の実感はないのか？」と書いたんですよ。

つまり命の実感がないから、私たちは余計な問題で揉め事をしたり悩んだり戦争まで殺し合ひます。どうせみんな

死ぬのに殺し合いをする。なぜ命の実感がいいのか？自分で命を作ってもいない、整えてもいないからです。掃除だったらみんなでこれからの場所を片づけるとすると、あーしんど、ちよつと一服しましょと努力の実感がありますよ。自分で努力したことは。ところが命については努力してない。だから「かしもの・かりもの」のありがたい点です、努力しないといけないんだったら心臓を動かすだけでも大変ですよ。とてもそんな人間業ではできない、神様がして下さっているから、つまり「かしもの・かりもの」で貸主の神様がして下さっているからありがたいんです。けどあまりにもそれに甘えてね。実感がありません。だからいろんな問題が起きてくる。医学が発達して健康は寿命は伸びたかもしれないけれども、他の問題、心が弱くなってしまう。

昔の人は命がいつどうなるか分からない。私の父母は助けてもらったその実感はもう心深くに食い込んでるんですよ。ありがたい、生かされている、一日を生かされている。それだけでもどんなにありがたいか、これが生きる意欲になるのです。喜び、勇み心になるんですね。

文化文明が発達するとなぜ心が弱くなるか？

だけど命の実感がなければだんだん生きる喜びが少なくなり無感動になってしまうんですね。文明が発達したらそうなる。逆説ですよ、文明が発達したらいいんですけど。逆に人間は心が弱くなって生きにくくなります。現代は生きづらい世の中とよくニュースで言われるけれども、もつと昔の方が生きづらかったのではないでしょうか？今なんか恵まれて電化製品に囲まれて生きている。昔の人は苦勞したのに、今では洗濯一つにしても、ご飯炊くにしても何もなくてもいい。昔の人がもしも生き返ったら怒りますよ。こんな便利な世の中になって、機械まかせの世の中になって何もしくても生活できるのに、何を文句を言ってるのか？と。何もせんでもええから心が弱くなるんですよ。余計なことで悩んでちつちやなこと悩んで、ちつちやな悩みが大きくなってしまふ。

じゃあどうすればいいか？命の実感に戻ることです。それを教祖はもう最初からおっしゃっていて、僕はようやく分かってきた。ちよつとおこがましいけどね、おこがましいことですけれども私は教祖のお話が教えがそういうことか、そういうことかと本当に分かってきた。

しかしそれでもまだまだ分からない。これ本当にね、毎月

のように、いや毎日のようにそういうことかと思うんですよ、面白いですよ。毎回のように、今まで考えてた、思ってたことと全然違う。今分かったことは命の実感をとにかく持つてもらいたいというのが教祖の全てのお話ですね。

『元の理』も『かしもの・かりもの』も、みんな命の実感を持つたためにおっしゃっている。命の実感を持たないでやると、「欲にきりない泥水」でああでもない、こうでもない、と、どんどん横道にそれてしまおう。

でも命の実感、これは本来出来ないのです。なぜか？自分で命を作るわけでもないし整えるわけでもないからです。原則的に原理的に人間は命の実感には本当は味わえない、自分でやったことだけが実感できます。何度も言うように料理でも洗濯でも掃除でも自分でやったことはやったぞ、ほらやったぞと。命の実感には本当は持ってないのです。持ちなさいと言っても持ってないね。

だから甘露台のおつとめを拝して、朝に夕に月次祭におつとめして、いのちの実感を受けとめる。そしたらちよつとだけ命の実感があるんですよ。心臓動いて血液がドッドドッと流れてる、肺が呼吸してくれている。自分の体を振り返ってね、少しだけ、本当はできないけど少しだけ生きていると

いうことがどんなことか実感を味わえる。そしたらもう何にもあとは言わないんです、誰が言うこと聞かなくても何が思わぬことが起きてきてもね。何にも言うことない、命さえあればなんとかなるんですよ。私たちの信仰は命の実感をとにかく一日一回でも二回でも思い出してそこに立ち返って家庭も社会もそこから立ち上げていくために、おやさまは私たちにこの教えを伝えて下さった。どうもありがとうございます。

記念祭

☆お知らせ☆

☆3月26日（金）9時 本部月次祭（祭典後は登殿参拝できます）

☆3月29日（月）18時 詰所祭（在住者のみにてつとめます）

☆4月4日（日）10時 女子例会・はるのひ会

☆4月11日（日）9時半 おぢばがえりひのきしんと男子例会（詰所）

☆4月18日（日）10時 本部・おやさまご誕生祭（祭典後は登殿参拝できます）

☆4月19日（月）9時半 本部・婦人会総会

※（代表者のみ参加なので、一般参加はまだ控えておきます）

☆4月22日（木）前日準備ひのきしん、神名流し（夕つとめ後）

☆4月23日（金）11時 <月次祭>

☆4月29日（木・祝） 全教一斉ひのきしんデー

8：30 はるのひ分教会出発→真田山墓地

お住まいの地域、各支部で参加して下さい

☆人生とは、生涯かけての心の成人・自分づくり

☆信仰とは人生観・世界観をみがきつづけること

そのために、用意されているのが

・おぢばがえり ・基礎講座 ・別席 ・三日講習会 ・修養科 ・講習

○修養科をおすすめしましょう！（毎月、25日までに申し込み）

・若い方=これからの人生の基礎固めとして

・年配の方=人生の美しい集大成のために